

非認知的能力と幸福

内田智士（倫理文化研究センター研究員）

はじめに

人は様々な能力を発揮しながら人生を送っている。その能力の中には、生まれながらにして備えられているものもあれば、教育により育まれたもの、もしくは自身の努力により獲得したものもあるだろう。それらをうまく生かすことによって、社会をよりよく生きたいと願うのは当然のことである。

人生をよりよく生きるための能力といえば、通常は社会の中で直接的に役立つものがイメージされやすいのではないか。文章を速く正確に読む能力、自分の考えていることを文章として魅力的に表現する能力、外国語を扱う能力、また論理的に考える能力や数字を正確に扱う能力などは、多くの人が高めたいと考えているものである。さらに直接的に役立つ能力は、職業と結びついていて、各種の資格としてその能力の有無を判定する制度が発展している。

これらは、一般的には知能の高さや知識の量や技術に関係する能力であり、それらを測るテストも充実している。例えば一般的に知能の高さを測る尺度として知能指数(IQ)がよく知られていて、IQが高いことは良いことであると認識されている。

このように社会の中で明らかに目に見える形で役に立つ能力は、認知的能力と呼ばれる。認知とは、記憶や学習・課題解決などの「知的な活動」(=情報処理活動)を行うことを意味する。

認知的能力が知能指数や記憶力(の結果としての知識=広い意味での読み書き計算に関する能力)に代表される「頭の良さ」を表すのに対して、非認知的能力と呼ばれる「人間性の良さ」を表す能力がある。それは、自制心・忍耐力・好奇心・粘り強さ・積極性・一貫性・協調性・共感力・他者への信頼感・誠実さなどとして表出される。非認知的能力は、性格や人格・気質などとも言い換えられるかもしれない。

非認知的能力は、認知的能力に比べて測定しにくく、注目されにくい。逆に認知的能力は、社会において直接的に役に立ち、目にはっきりと見え測定しやすい。このことから、自分や子供の能力を育み開花させるといった場合の「能力」は、認知的能力を意味することが多い。

認知的能力が、人生において役に立つのは間違いない。しかし、最近の認知科学や脳科学、また教育学や経済・経営学などにおける研究の結果、非認知的能力の重要性が明らかになりつつある。そのような研究を参照せずとも、忍耐力や活発さ・好奇心などの非認知的能力が認知的能力の養成に寄与するだろうことは、想像に難くないだろう。その意味で、非認知的能力は認知的能力の基底にあると言えるかもしれない。本稿では、非認知的能力の重要性を示唆する、いくつかのよく知られた研究結果を紹介したいと思う。